第 11 回
日本ヘルスコミュニケーション学会
学術集会
プログラム・抄録集

日時：2019 年 9 月 21 日（土）・22 日（日）

会場：東京大学 医学部 1号館・教育研究棟

開会のご挨拶　－これまでの１０年、これからの１０年

第１１回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会会長
東京大学大学院医学系研究科医療コミュニケーション学教授

木内貴弘

第１１回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。早いもので、日本ヘルスコミュニケーション学会（設立当時は研究会）の設立、及び第１回学術集会を東京大学で開催してから、既に１１年が過ぎました。この間、九州大学（２回）、京都大学（２回）、慶應義塾大学、岐阜大学、広島大学、西南学院大学での開催を経て、２回目の東京大学での開催となりました。新しい令和の時代を迎え、「これまでの１０年」の成果を踏まえて、「これからの１０年」の成果に繋げられるような学術集会にできればと考えております。前回、九州大学主管で開催された第１０回学術集会では、参加者、演題数とも過去最高となり、内容的にも大変な盛況でした。今回は、東京開催という地の利もあって、演題数は 62 題と過去最大となりましたが、参加者や内容の面でも前回に負けないようにがんばりたいと思います。

近代医学は、19 世紀に、疾病発生のメカニズム解明、診断や治療法開発のために、その当時誕生しつつあった近代生物学の理論や知見を活用することで始まりました(biology-based medicine)。例えば、ウィルヒョウの細胞病理学、コッホによる細菌学等です。生物学は、第二次大戦後に分子生物学として、現在に至るまで医学を支える大きな柱となっています。２０世紀には、医師の経験や勘及び動物実験結果の外挿に基づくのではなく、個体としての人間を対象とした臨床・疫学研究等のデータ（エビデンス）に基づいて、診断、治療、予防法の評価を行うことの必要性が理解され、実践されるようになりました。いわゆるEMB(=Evidence-Based Medicine)ですが、私はもっと広く一般的にデータに基づく医療（Data-Based Medicine）と呼びたいと思います。データに基づく医療は、人工知能とも関連して、医学の２番目の大きな柱となっています。私は、生物学、データに次ぐ、３番目の大きな柱が、コミュニケーション(Health Communication)だと考えています。生物学の研究成果や、データをもとづいた診断・治療法を開発は、確かに重要ですが、これらの成果を市民や医療従事者に適切に伝えて、理解、納得してもらい、受診・健康行動や医療水準の向上につなげることは、これらに劣らず重要であると考えます。

医学の歴史において、長い間、ヘルスコミュニケーションは、体系的に研究や教育を行う対象とは考えられてきませんでした。ヘルスコミュニケーションという言葉の使用は、1975年に国際コミュニケーション学会にヘルスコミュニケーション部門が設置されたのをきっかけにして広まり、現在では、米国の公衆衛生大学院には、ヘルスコミュニケーション学を専門とする教員が所属することが一般的となっています。また米国において、人文社会系のコミュニケーション学研究者の間で、保健医療に関する研究の人気が高まり、最も研究成果の増えている分野になっています。日本においては、ヘルスコミュニケーション学は、まず1990年代頃より医学教育における臨床能力の養成の文脈で広まり、2000年以降、九大、東大、京大、帝京大で、公衆衛生学分野でのヘルスコミュニケーション学関連の専任教員のポストが設けられました。本学会が、設立されたのは、2009年で、当初は人が集まるのかどうか大変心配しましたが、歴代の学術集会の大会長、運営委員の諸先生方、参加者の皆様の努力で、日本の医学、コミュニケーション学において、「ヘルスコミュニケーション」という言葉が広く定着し、そういう研究教育分野があるということが広く認知されるようになったと考えています。この中で日本ヘルスコミュニケーション学会は日本においてヘルスコミュニケーション学を担う人々の最も重要なコミュニティーとなりました。また他の学会で、ヘルスコミュニケーションに関する話題が取り上げられることも増えています。１１年前に学会と設立した時には、「健康コミュニケーション」学会、「保健医療コミュニケーション」学会等も学会名の候補になりましたが、今考えると「ヘルスコミュニケーション」学会にしてよかったと感じています。データに基づく医療が受け入れられるまでには、何年もかかっています。医学系、コミュケーション学系の大学にヘルスコミュニケーション学の専門家が必須とみなされるようになるには、まだまだ多くの年月が必要かもしれません。

本文の後に歴代の日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会で、どのようなテーマが取り上げられてきたかについて、一覧表をつけてあります。歴代の会長が、いかにテーマを工夫してよくきたことがよくわかります。また各会長のヘルスコミュニケーション学に対する思いが良くあらわれていることと感じています。今回、学術集会会長を引き受けるにあたって、ヘルスコミュニケーション学の次の１０年の課題として、まず浮かんだのが研究方法論でした。ヘルスコミュニケーション学がある程度の認知を得た今日、次の目標は研究成果の充実にあると考えました。ヘルスコミュニケーション学会には、医学、コミュニケーション学、社会学、言語学、情報科学、心理学、社会心理学、マーケティング論等の様々な研究者が集まっています。この分野の学際的な性格を表しており、これらの様々な分野専門家が集うことによって、化学変化がおき、次のイノベーションにつながることが期待されています。無論、このようなヘテロな集団においては、異文化間コミュニケーションという課題も発生しがちですが、従来は、会員の皆様の努力により、大きな争いに発展することはなく、乗り切ってきました。研究の発展のためには、様々な分野の研究方法論について、お互いの知見やノウハウを共有して、各研究者が持っている研究方法論と、他の研究者が持っている多様な研究方法論とを、比較検討、取捨選択、融合して、新たに有用な研究方法論として展

開していくことが望まれます。このため、現在有しているお互いの研究方法論について、広く共有するために研究方法論をテーマとすることにいたしました。ヘルスコミュニケーション学にとって、実践も勿論重要ですが、実践から研究へ、そして研究成果を実践に還元するという双方向の営みが、学問としてのヘルスコミュニケーション学の発展のために非常に重要であると思います。ヘルスコミュニケーション学において、問題が最終的に解決されるということはありません。生物学において、決定的な実験によって、今まで謎であった問題が解決することや、臨床医学において、大規模で質の高い臨床試験により、積年の論争が決着することがあります。ヘルスコミュニケーション学では、正解は１つではなく、このようなはっきりとした白黒はつけられません。その研究方法論も最終的に確立してしまうということはないと思います。そこで、「研究方法論の確立」ではなく、よりよい方法論を目指して努力する過程が永続することを念頭に「研究方法論の探究」としました。今までの日本ヘルスコミュニケーション学会の学術集会は、そのテーマに各会長のこだわりが伺え、そのこだわりが大きな成果をあげてきました。今回は、従来取り上げられてこなかった研究方法論にこだわりたいと思います。

よい学術集会にすべく、いろいろと考え、教室関係者とも繰り返し、繰り返し、打ち合わせを行い、日本ヘルスコミュニケーション学会運営委員の諸先生方にもご意見をいただきながら、試行錯誤の末、今回のプログラムが誕生いたしました。是非、素晴らしい学術集会にしたいと考えておりますので、参加者の皆様、発表者の皆様、また日本ヘルスコミュニケーション学会運営委員の皆様、ご支援、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

木内貴弘（東京大学大学院医学系研究科医療コミュニケーション学教授）略歴
東京大学医学部医学科卒業。内科臨床研修の後、同大学院医学系研究科（医療情報学）入学。同退学して、同大学院健康科学・看護学専攻疫学・生物統計学助手、同医学部附属病院中医療情報部講師、准教授を経て、現職。研究領域は、ヘルスコミュニケーション学、医学研究情報学等。

日本ヘルスコミュニケーション学会（研究会）学術集会の開催記録とテーマ

第１回日本ヘルスコミュニケーション研究会（東京大学　木内貴弘）
医療系大学等におけるヘルスコミュニケーション教育―現状及びその意義と役割

第２回日本ヘルスコミュニケーション研究会（京都大学　中山健夫）
ヘルスコミュニケーションの現状と展望：対人コミュニケーションから異文化コミュニケーション、マスメディア・キャンペーンまで

第３回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会（九州大学　荒木登茂子）
大災害とコミュニケーション

第４回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会（慶應義塾大学　杉本なおみ）
健康と医療をめぐるコミュニケーション　－実践知を学問にすすめるためにー

第５回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会（岐阜大学　藤崎和彦）
ヘルスコミュニケーション教育の現状と未来

第６回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会（広島大学　小川哲次）
地域文化とヘルスコミュニケーション

第７回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会（西南学院大学　宮原哲）
「コミュニケーションから見たヘルス」～今さら聞けない、でも気になる関係～

第８回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会（国立がん研究センター　高山智子）
人と人がわかり合うには　－「生」が放つコミュニケーション

第９回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会（京都大学　中山健夫）
共に変わり、共に創る：ヘルスコミュニケーションの「力」

第１０回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会（九州大学　萩原明人）
国際化とコミュニケーション

第１１回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会（東京大学　木内貴弘）
ヘルスコミュニケーション学の研究方法論の探究

実行委員会

東京大学大学院医学系研究科医療コミュニケーション学分野

大会長　木内貴弘

実行委員　奥原剛　上野治香　岡田宏子　軽部祥子

事務局　香川由美　後藤英子　常住亜衣子　調律子　浅井文和　古川恵美
横田理恵　樋口紗恵子　家れい奈（以上、東京大学）
小川留奈　齋藤宏子（帝京大学大学院 公衆衛生学研究科）

運営委員会

（以下五十音順）

秋山 美紀　慶應義塾大学環境情報学部
阿部 恵子　愛知医科大学看護学部
五十嵐 紀子　新潟医療福祉大学社会福祉学科
池田 光穂　大阪大学COデザインセンター
石川 ひろの　帝京大学大学院公衆衛生学研究科
岩隈 美穂　京都大学大学院医学研究科医学コミュニケーション学分野
大野 直子　順天堂大学国際教養学部
岡本 左和子　奈良県立医科大学公衆衛生学講座
奥原 剛　東京大学大学院医学系研究科医療コミュニケーション学分野
河口 浩之　広島大学病院口腔総合診療科
河村 洋子　静岡文化芸術大学文化政策学部
木内 貴弘　東京大学大学院医学系研究科医療コミュニケーション学分野
榊原 圭子　東洋大学社会学部社会福祉学科
島崎 崇史　上智大学文学部保健体育研究室
杉本 なおみ　慶應義塾大学看護医療学部
杉森 裕樹　大東文化大学スポーツ・健康科学部
孫 大輔　東京大学大学院医学系研究科医学教育国際研究センター
高永 茂　広島大学大学院文学研究科
高山 智子　国立がん研究センターがん対策情報センター
田口 則宏　鹿児島大学大学院医歯学総合研究科歯科医学教育実践学分野
竹中 晃二　早稲田大学人間科学学術院
武林 亨　慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学
中山 和弘　聖路加国際大学看護情報学
中山 健夫　京都大学大学院医学研究科健康情報学分野
野呂 幾久子　東京慈恵会医科大学人間科学教室
萩原 明人　九州大学大学院医学研究院医療コミュニケーション学分野
長谷川 聡　北海道医療大学 看護福祉学部 臨床福祉学科 社会福祉学
原木 万紀子　立命館大学共通教育推進機構
藤崎 和彦　岐阜大学医学教育開発研究センター
本間 三恵子　埼玉県立大学健康開発学科健康行動科学専攻
宮原 哲　西南学院大学文学部外国語学科
宮脇 梨奈　明治大学文学部
安村 誠司　福島県立医科大学医学部公衆衛生学講座